

「採薬記」の世界

板 坂 耀 子

(昭和六十三年九月十日 受理)

一 はじめに

小野蘭山、山本篤慶ら本草学者の記した「採薬記」類について考察する。彼らの多くは幕府に仕えた医師であり、幕命をうけて薬草を採取するため山野を巡った。その際の旅の行程や採取した薬草名を記したものが「採薬記」である。単に草木の名称の膨大なメモのみにおわっているものも多いが、中には登山の苦労や経過した村落の描写等を記述しているものもあり、その、感傷性を排した、冷静で具体的な叙述には見るべきものが多い。

近世に入って、信仰としての登山から、近代登山と共通する、探検家や科学者としての精神を有する登山への推移があり、登山を題材とした紀行文類にもそれは反映する。^{註1}「採薬記」はそのような山岳紀行の一角を占めるとともに、幕臣が、公務に基く旅として記した記録である故に、その積極的な現実肯定、支配者としての視点などは、やはり近世紀行文中に重要な位置を占める、蝦夷紀行や日光紀行とも共通する性格を持つ。^{註2}^{註3}何より、そこに存する科学者や博物学者としての精神が、近世初期の貝原益軒の紀行に既に存するように、旅中に見る動植物から、ひいては

土地の産物、人々の生活までの正確な観察につながり、中世以前の紀行文とはちがった近世紀行の性格を生んでいることを注目したい。

二 採薬の実態

まず、各種の採薬記からうかがわれる、当時の採薬そのものの実態について述べよう。

採薬は主に春と秋に行われた。深山にふみこむことが多いため、たとえば、暴風雨にあつて、

「余りに強き風雨、詮方なくして腰帯を解き、是を岩の鼻に引かけ、是を力にひしと取付て、貯へもちたる朝鮮人參を少し口に含み、漸に氣力を補ひ、彼風を凌ぎ、此節懐中の品、其外用具等を打捨、心中に日本大小神祇、又平日信ずる所の佛名念ず。」^{註4}(植村政勝「諸州採薬記抄録」より、享保六年閏七月朔日、鳥海山にて)

のような危険に陥らないため、悪天候の多い時期をさけ、あるいはまた、寒さのために花や葉が枯れ落ち、

「樹下陰鬱トシテ奇卉多シ。夏月探索セバ葎若、人參、蒜藜声、鬼兒

等ノ品モアルベケレドモ、時已冬初ニシテ寒威凄然タリ。霜雪已降、木葉盡脱ス。惜ベシ。今、記スルトコロ、只道傍見当ルトコロノ丹木ヲ録スルノミ。復再遊ノ時アラバ、詳ニ採葉セン事ヲ望ム。(山本篤慶「山陰四州採葉記」^註より、天保三年十月十二日、妙見村)

といった、採取不能の状態を招かぬためであつたらう。

一人で出かけることはほとんどなく、大抵は次の資料にみるように、少くとも二、三人がつれだっている。

「文政九年夏、田中寛輔、中嶋正策ト與ニ比良ニ採葉ス。五月二十七日、宅ヲ出デ、江州途中ニ宿ス。」(山本篤慶「比良採葉記」)

「天保甲辰八月、與百々雲鋤、約采葉于江之中河内、期以九日起程。

九日黎明出舎、伴雲鋤、取路三條、至大津少憩。」(山本弦堂「中河内採葉紀」行)

その他に、大勢の人夫をつれてゆく場合もある。また、行先々で必ず案内者を雇う。いづれも、不慮の事故等避ける配慮によるであろう。

そもそも、採葉の歴史は古いが、江戸後期特に盛んになったのは、朝鮮人参をはじめとした高価な薬草を、日本国内で採取栽培できぬかと、將軍吉宗が調査を命じたことにある。したがって、採葉記という名で残っている書の内容は、多くが次のような膨大な、動植物類名のメモである。

「菊山村へ出ル木戸ト云處ノ入口ノ山ニ有之品類

チタケサシ マメツタ 夏枯艸一種^{草本ノ} シ、ラン

蝸牛ノ一種殻扁ナルモノ

伊岐津志村ヨリ錦織村迄ノ品類

前胡 トコロ シライト艸 ヤマホト、ギス ロクテイ艸

ツルリンドウ マメツタ ヒトツバ チタケサシ^{多クアリ}

リンボウキク ミヤコクサ ヤマヒヨドリバナ チゴユリ

ムカゴサウ ハナイカダ 蝸牛ノ殻高ク黄色ノモノ伊岐津村ノ内ニ

アリ」(大窪昌章「濃州信州採葉記」 天保七年)

さて、このようなメモに記される草木は、彼らが実際に採取したのか、見かけただけのものか、明確でない。たとえば山本良臣「雲州採葉記事」(天保十五年)では、「路上所見品物」「望葉山所見」「所得之品」などの項目をたてる。「所見」「所得」の区別がある以上、見かけただけでなく、採取したものもあるのである。

「還逆旅、包所採草根。夜微雨。」(山本弦堂「中河内採葉紀」行) 天保十五年八月十二日)

のように、取ってきた草木を、宿舎で包むという記事もあり、

「樹梢ニ花咲リ。枝折ル事能ズ。惜カナ。」

「枝ヲオル事禁ズ。」

「柳多シ。柳明神ト云フ。折リトル事ヲ禁ズ。」

(水野皓山「皓山伊吹山採葉記」 文政元年四月)

などと、木の枝を折りとることになりこだわる例があるのも、それを裏づけるであろう。

しかし、見かけただけで記している場合にしても、一見して、それだけ多くの草木等を識別できるためには、相当の博識が必要とされるにちがいない。彼らが、それを得るための努力を惜しまなかったことは、種々の資料にうかがわれる。

岩瀬文庫に「読書室日抄」という、各冊28〜85丁の59冊の写本がある。^{註7}

国書総目録では「日記」と分類されているが、これは山本篤慶が、本草に関する和漢の書^註から、絵図も含めて、さまざまな記事を抄録したもので、嘉永〜弘化年間にわたる。膨大な資料ノートといつていい。同じ篤

慶の「勢志二州採葉記」の文政十三年四月十四日の条には、

「十四日、雨。山形屋伝右衛門ニ就テ、荊州府志、嘉定縣志、兩浙海塘通志、崇明縣志、甘泉縣志、饒州府志、處州府志、沢州府志、江都縣志、寶山縣志、鄆陵縣志、威海衛志、儀真志、吴江縣志、元和郡縣圖志、清遠縣志、邦陽縣志、青浦縣志、臨清縣志、永嘉縣志、淑浦縣志、岳州府志、安岳縣志、零陵縣志、大名府志、無錫縣志、登封縣志、德清縣志、建寧府志、永州府志、長沙府志、翁源縣志、嘉興縣志、一握坤輿、凡六十套三百九十三本ヲ借り、物産ノ部ヲ抄写ス」

と、兩中の一日、四百点近い本を抄写したとの記事がある。また、水野皓山の「皓山隨筆」は写本一冊、87丁で、内容は本草に関する雜録であるが、その中には淨瑠璃「那須与一西海硯」の抜書が16丁含まれる。

この作品の冒頭が「繼木ハ根ヨリ恵ヲ上シ……」の文句を有することしか、理由が考えられない。いかに本草学者たちが、骨身を惜しまず積極的かつ精力的に、あらゆる資料から知識を摂取しようとしたか、これらの例は、伝えている。

「採葉記」の例は、伝えている。

同士の士たちとの交流にも、彼らは熱心であった。「採葉使記」(宝曆八年序)の小石川植物園所藏本の序跋^{註10}には、

「享保初の頃、東都に阿部友之進照任、松井玄蕃重康といへる人ありき。各、諸葉の良否を弁じて形状を多識す。且深山幽谷を涉り、遠境に經歷する事を好めり。一とせ 台命を蒙り、諸国に遊行して、其処々の産物を見出し、普く世上に知らしめ、又珍敷品々を官に献せるものまた少なからず。」(序)

(3)

「此書、阿部氏と予亡父と談話なりしを、阿部氏の門人等、筆記せしを、後藤氏に見せしに、則注して侍るよし、安永の比、聞侍れど」(跋)などと、その一端がうかがわれる。あるいは、旅先での他者の蔵品、

蔵書、また名園などの見物にも、強い情熱をかたむける。

「十七日 西村氏ニアリ。石品ヲミル。総計百余品。

十八日 (略) 西村氏ノ収藏スル書籍ノ目錄ヲミル。

十九日 暑氣殊ニ甚シ。所藏ノ藥品、數百品ヲ示ス。(略)

二十一日 (略) 又、足代氏ニ至リ、所藏ノ石品ヲ見ル。凡數百品アリ。」(「勢志二州採葉記」五月の記事)

「かたへを見れば、御園の扉のひらきたれば、さしのぞき見れり。むかしより聞へ侍りける、都下第一の名苑のありさま、いふもさらなり。

(略) 水鳥の魚を求るさまして、一步をすゝめ一望をやれば、おそるゝ心もいつしかにわすれられて、あるじなるこゝろなり。」(「読書室隨筆」^{註11})

これらは、どちらかというところ、知的なエリートとしての彼らの、知識の宝庫である海外の文献や珍しい文庫、同じ優秀な仲間たちとの知識の交換、禁じられた高貴な場所、などへの欲求、健全な意味での上昇志向である。ところが、採葉家には、また別の一面も必要とされる。既存の知識を限りなく摂取し、高度な知識人の世界を希求しつづける一方で、彼らは、現実の草木類を見たとき、それが現地でどう呼ばれているかを知らねばならず、そもそも、草木類を見に行くまでにも、山野にふみこまねばならず、したがって、当時の最も辺鄙な村々を巡って、そこに住む人々の生活にふれ、草や木の名について、それがその土地の人々の生活とどうかかわっているかについて、そこに住む庶民たちと話してまなければならなかった。当時では最高の科学者であることへの努力を怠ってはならず、しかも誰よりも民衆の中にとけこむことが要求された。

事実、彼らの紀行文は、

「吉田ノ人言フ、此地ニ、ヒトモトス、キアト。

土人言フ、足高山ニ、芹葉黃連アリト。」(小野蘭山「甲駿豆相採薬記」 享和元年九月十三日)

「土人言フ、石葦焼灰、カミノ油、或ハ麻油ニテネリ、ネプトに傳テ効アリト。」(同十五日)

「チ克蘭 方言イハバ、キ 土人言フ、田沢村及上増村ノ城山ニアリ。」(同二十三日)

「大葉藻 モバ 方言ムクシオ 土人コノ葉ヲ取、水ニヒタシ、ソノ水ニテ火ヲ清ムト云。二見ノ介店ニ多ク蓄テ參詣人ニ売ル。」(山本篤慶「遊勢採薬記」 天保二年十月一日)

などと、土地の人々から得た情報を数多く記し、また、土地の人々に薬の製法などを教える記事も、よく登場する。

子
 耀 「此小金ケ原ノ入口ヨリ西北ニ、篠籠田村ト云アリ。小金駅ヨリハ纒ニ老里許。此辺、萎蕤イヌイ甚多シ。故ニ此處ノ土人ニ萎蕤ノ製法教ヘント思ケルニ、其節、挿秧ノ節ニシテ、男子一人モ家ニ在ズ。麦隴中ニ白髪ノ老翁一人、草ヲ取り居タリ。其所へ行、萎蕤ヲ来テ、名ハ何ト云ト問ヘバ、方言ニアマドコロト云ヨシ語レリ。方言、古名ニ的当セリ。製法等委シク傳ヘヌ。又、其老人語リシニハ、此少輿ニ、苦參クモトト云モノアリ。此艸ハ如何ナルヤト尋ニヨリ、製法等ヲ教テ別ル。此人、大京院ト云テ其所ノ修現者ナリ。」(小野蘭山「遊毛記」 享和元年四月九日)

これらの記述は、土地の人々との交流が密接であったことを示している。しかし、もとよりそれは、きれいごとばかりではない。ときには、土地の人々から、採薬活動そのものを、拒否されることもあった。

「此地、守護使不入ノ地ナリトテ、僧徒拒事固シ。故ニ、採薬ニ及バズ。」(「遊毛記」 五月十三日)

土地の人々が、わざと行きどまりの道につれこんで、山の奥への案内

をしなかったのではないかと、疑うこともあった。

「行事七八丁ニシテ、手ヲ豎タルガ如ク攀ベカラズ。山上ヲ望バ積雪皓然タリ。(略) 土人曰ク、『此辺ヨリ上ハ常ニ上ル事ナシ。若、適ニ大旱ニ遇ヘバ、零ちやいセンガ為ニ上ルノミナリ。小人数ニテハ中々上ルベカラズ。』ト云。余以為ク、此ヨリ上ニ躋のぼバ、奇品モ多カルベシ。土人、或ハ窮谷ニ入ラシムルカト、遺恨太ダ多シ。」(三谷公器「信州駒嶽採薬誌稿」 享和二年五月二十二日)

植えるようにすすめた草木を、村の長がどうしても承知しないため、地方の役人に依頼して交渉をすすめることもあった。

「二十日、越賀ニ在リ。此地、橄欖・使君子ヲ栽ベキ処ニシテ、他村ニ生育スベキ地ナキヲ以テ、再三、里長ニサトシテ栽ヘン事ヲ命ズレドモ、固執シテ従ハズ。己ム事ヲ得ズ、僕ニ命ジテ鳥羽ニ達シシテ小浜清渚ニ右ノ趣ヲ告グ。」(山本篤慶「志州採薬記」 文政十三年八月)

そのような中では、土地の人々の生活や産業に対して、興味を抱いて観察する姿勢が生ずるのは、むしろ当然なことだろう。「山陰四州採薬記」は、次のような製塩のさまを、長く、ていねいに記述している。

「石浦ヨリ河ニ従ヒ、由良ニ至リ、海浜ニ出デ、塩浜ヲ見ル。製法、播州ニ同ジ。沙ヲ平ニシテ場ニツクリ、婦人、桶ヲ擔ヒ、潮ヲ酌ミ、擔来リテ沙ニソ、グ。如此スルコト数日、ソノ沙ヲカキ寄せ、イカキニ入桶ノ上ニ置キ、潮ヲ上ヨリ注グトキハ(下略)」

今少し、彼らの記述態度について見よう。

さきに述べたような彼らの博識、あるいは土地の人への聞きとり調査をもってしても、なお判別できない動植物もある。彼らはそのようなとき、互いに討論をすることもある。

「茶店ノ前ニ樹アリ。大木、葉ハ桐ニテ青シ。(略)藤井蘭陵云、『名ヲ知ラズ』。皓山云、『恐ハ椅ナラン』。中川忠右衛門云、『国友ニアリ。之ト同物ナラン』ト云フ。予、国友ヲ見シニ同物ナリ。紅実ヲ結ブヨシ。国友ノ方言、サンゴジュギリト云フ。イヨク椅ナル事ヲ知ラレタリ。」(皓山伊吹山採葉記)

しかし、どうしてもわからない場合には、正確に記しのごすことを心がけている。図をとる場合もあるものの、このような記述は必然的に事物を細かく写生する文体を發展させるであらう。

「小浦ノ海辺ヲ巡ル。(略)異魚 (略)全身銀色ニシテ淡黒斑點アリ。頭ハ微青色ヲ帶ブ。小口大目、ソノ鬣長大、寸余、後ニナビク。色朱ノ如シ。生ナル時、腕上ニ置ケバ、手染リテ赤クナル。(略)土人ニソノ名ヲ問フニ、識ルモノナシ。」(小野蘭山「紀州採葉記」享和元年)このように、理解や判断が不可能な場合には、とにかくありのままを記して後人の判断を待つ、といった姿勢は、他の面でも見られ、これはむしろ、彼らの科学者としての良心的態度と見るべきであらう。たとえば彼らは、

「所のものを是を禁止すといへども彼山に登る。此山におゐて大小便する事を常に禁止す。然りといへ共、予が従者其外人歩等も是をゆるすに、されども何のさわりもなし。(略)彼殺生石を打割て様子を見、又なめて味を考見るに、さして常の石に替る事なし。」(諸州採葉記抄録)

と、豪胆ともいべき強い合理主義精神を有していた。しかし、だからといって、行く先々の村で聞いた土地の俗説や怪異談をやみくもに否定はしない。聞いたとおりに書きつけて、

「村老の語る俚に記。」(同 卷二)

「村老の語り伝ふ所、聞尽に是を記す。」(同 卷四)

「所の者語るにまかせ記す。」(同)と、結ぶのである。確認できないことについては、正確な伝達者に徹することを、彼らは常に心がける。

このような旅行は概ねかなりの強行軍で行われている。しかし時には「十一日ヨリ十四日迄休息。此度ノ採葉、熊野ノ外ハ御頼無之趣ニ依リ四ケ日旅舎ヲ出デズ。従者病快者ハ、名勝ヲ巡ル。」(「紀州採葉記」三月)

というようなこともあって、適度に楽しみましたようである。

時代や、個人の状況によって、やや差もあるが、当時の採葉の実態は、ほぼ、右に述べたようなものであったと考えてよい。

三 採葉記の書誌

このような採葉記類が、どの程度現存しているか、まだ正確には把握できない。管見のもののみについて、まとめておきたい。

前述したように、採葉記は、本来きわめて実用的なものである。動植物名のメモを中心とした、短かいものが多い。特に、次にあげるものは、岩瀬文庫73—55「常野採葉記」の末尾に収録され、いずれも1—6丁である。

○天台山採葉記(文化六年九月)

○大原採葉志(同右)

○伊香立採葉志(文化六年十月)

○北丹波山国採葉記(文化八年八月)

○陶陰子採葉志(文化九年五月、宇治)

○大峯採葉志(文政四年八月)

○安政五年戊午五月局嶽採葉記

○解毒齋採葉記(安政六年四月)

○信州駒嶽採葉誌稿(三谷公器)^{註13}

○壺根岳採葉記

以下はそれに比してやや長く、時に記述も含む。

○藤子南紀採葉志稿(享和二年二月、小野蘭山の紀州採葉に同行したものの。岩瀬文庫37—140「伊勢及紀州採葉記」の後半部分はこれで、蘭山のものではない。他に小石川植物園「蘭山採葉記」にも所収。)

○日光采品録^{註14}(文政五年夏、蘭山の「日光採葉記」に、喜多村槐園、成田三節が改訂を加えたもの。58丁の写本一冊。東大図書館蔵。)

子
○南紀採葉記^{註15}(文政九年秋、熊野行。岩瀬文庫40—88の写本一冊。蘭山の紀行とあるが、田中成充のもの。全47丁中、19丁のみで、他は「佐渡奇石録」「松舎介品録」など他者の作品。内容はほとんどが動植物名の坂み。)

板
○弦堂中河内採葉紀行^{註16}(天保十五年八月、山本弦堂。友人と二人の私的な旅のようである。記述も多い。6丁の写本一冊。岩瀬文庫30—33。)

○雲州採葉記事^{註17}(天保十五年四月、山本良臣。同行者、行程、時間等を明記し、採葉の実態を知るに役だつ。17丁の写本一冊。岩瀬文庫17—52。)

○越後採葉記^{註18}(彩色図多。品目と説明のみ。写本一冊、15丁。小石川植物園蔵。)

○遊霧嶋山記(田代安定。冒頭三丁のみが文、後はすべて動植物名のメモ。天逆鉾の記述などあり。写本一冊、14丁。国会図書館蔵。)

以下は翻刻されており、解題等を有している。

○木曾採葉記(文化七年六月、水谷豊文。「江戸期山書翻刻叢書」六所収。)

○濃州信州採葉記(天保七年四月・七月、大窪昌章。「隨筆百花苑」第四卷所収。)^{註19}

○高千穂採葉記(天保十五年三月、賀来飛霞。「日本庶民生活資料集成」第二十卷所収。)^{註20}

以上、一々の作品にふれるいとまはないが、やや問題のあるものとして、岩瀬文庫27—48「皓山伊吹山採葉記」について述べておく。9丁の写本一冊、自筆本で、記述も多く、面白い。中表紙題には「文政元年戊寅四月 伊吹山采葉行程記」とあるのだが、岩瀬文庫蔵の、著者水野皓山の「皓山日記」^{註22}(50—69丁、全10冊)の該当部分を見ると、

「○(四月)十八日晴。結髪。(略)○廿日(略)中野入来。手提大カゴ返却也」(日記第五冊。内題「文政庚寅年」とあるもの。)

などと、出立や、伊吹登山にあたる日に、照応する記事がない。一年前の日記に、

「(四月)十四日。江州伊吹登山三付出立。(略)十九日。朝霧フカシ、後晴。伊吹登山。登ル人々、世継氏、谷川氏、野拙、葉肆平兵衛、上野人太輔源六。太平寺村ノ農人清平ヲ案内者トス。五時出立。山路七分マデ、陽地ニテアツシ。草ヲフミユク。諸所ニテ握飯ヲ出シ休ス。雲烟出沒シテ湖ヲノゾミ、或ハカクル。」(日記第四冊。内題「丁丑雜記」とあるもの。)

とあって、中表紙題の「文政元年戊寅」は、文化十四年丁丑の誤りであろう。

ところで、この日記の記述は、「採葉記」のそれと、内容はまったく重複しておらず、時には日記の方が文学的な描写をする。採葉記とはやはり、あくまで実用的なものとしてとらえられ、記されたことがわかる。

しかし、根本はそうでありながら、その中から文学として面白い部分が次第に成長し、分化していく傾向がある。採薬記類の中では、写本も多く残り、代表的な存在である、山本篤慶、小野蘭山、植村政勝の三名の作品について、それを見ていきたい。

1 山本篤慶の採薬記

山本篤慶（二八〇八〜一八六四）は、京都の儒医で本草学者、他に、錫夫、沈三郎、榕室、読書室とも称する。父はやはり本草学者として有名な山本亡羊で、読書室は本来、父亡羊が家塾として用いた講学所の名である。

岩瀬文庫には写本七冊の彼の採薬記が残っている。^{註24}その内容は以下の通りである。

第一冊（48丁）

東江採薬記（文政五年）

金剛山採薬記（同七年）

勢記採薬記（同八年）

比良採薬記（同九年）

遊撰採薬志稿（同）

（いずれも動植物名のメモが中心。記述は少ない。）

第二冊（44丁）

◎勢志二州採薬記（文政十三年閏三月〜五月）

（四月の初に一度帰宅している。後半になるに従い、記述が多く、描写が細かい。）

第三冊（29丁）

経峯并布引山採薬記（文政十三年五月二日〜三日）

志州採薬記（同八月十三日〜三十日）

（前者は草木名のメモ多し。後者は記述が細かい。）

第四冊（43丁）

勢志二州採薬記（文政十三年五月二十九日〜六月十一日）

（他人に見せてもらった品類のメモ、人名録、碑銘の写など。）

第五冊（30丁）

遊勢採薬記（天保二年九月八日〜十月二十一日）

（草木名のメモ多し。彩色図あり。）

第六冊（41丁）

◎山陰四州採薬記上^{註25}（天保三年九月十四日〜十月三日）

（内容が豊富で、描写も細かい。）

第七冊（37丁）

◎山陰四州採薬記下（天保三年十月四日〜十八日）

（第六冊に同じ。温泉、銀山の記事などがある。）

題名はそれぞれ、内題によっている。外題は第二冊目が「勢志採薬記二」となっているのを除けば、すべて「採薬記 一（三〜七）」の如くである。

◎印を附した二点が特に記事が詳細で、文学作品としての面白さを備える。そうすると第三〜五冊に、メモ風のものが入りすぎていて、後になるにたがって記事が細かくなるという流れは存しないかのようだが、これは、この本のまとめ方にも問題があって、第四冊は第二冊にすぐ続く、末尾の部分であり、第三冊の前半は、第二冊の「勢志二州採薬記」四月十日の条に、

「十日。土山ヲ発シテ津ニ至リ、河野氏ニ宿ス。今日ヨリ五月十一日

ニ至マデ河野氏ニ逗留ス。滞留セシ間、内々 君侯ヨソ河野道徳へ向テ物産ノ事御尋アリテ、考按并葉腊花鏡救荒ノ記聞及経峯採葉記等ヲサシ上ケレドモ、内々ノ事故、省テ録セズ。」(傍線筆者)
とあるように、もともと、この旅の途中で、別に記されて提出された報告書である。

◎印の二書については、既に何度か引用しているので、ここで改めて内容を紹介することは省く。しかし、「経峯採葉記」のように記録、報告的なものと、文学的な要素を多く含む「勢志二州採葉記」が、一つの旅から生まれ、やがて、更に読物としての面白さを有した「山陰四州採葉記」が成立していくのは、採葉記の文学作品として求められていく傾向を示しているといつてよい。

2 小野蘭山の採葉記

時代はやや遡って、小野蘭山(一七二九〜一八一〇)は、シーボルトに日本のリンネと呼ばれた、京都の著名な本草学者で、門人も多く、その一人が前項で述べた山本篤慶の父亡羊であった。

彼の採葉記も多く残り、書名、作者名等にかんがりの混乱が生じている。管見のもののみを、整理して次に記す。

◎享和元年春、常陸ノ日光の旅の際の作品。

「遊毛記」 ①岩瀬文庫152―126 「採葉紀行」

◎国会図書館本翻刻「江戸期山書翻刻叢書五・遊毛記」

「常野採葉記」 ①岩瀬文庫73―55 「常野採葉記」前半

◎同右30―89 「蘭翁採葉記」前半

◎小石川植物園二冊本「蘭山採葉記」第一冊前半

◎無窮会9513 「日光採葉記」

◎岩瀬文庫15―99 「日光採葉記」(水野皓山著とあり。)

◎同年夏、甲斐ノ相模の旅の際の作品。

「甲駿豆相採葉記」 ①岩瀬文庫88―15 「富士採葉記」

◎同右30―89 「蘭翁採葉記」後半

◎小石川植物園「蘭山採葉記」第一冊後半

◎同右「甲駿豆相採葉記」

◎享和二年春、熊野行の際の作品。

「紀州採葉記」 ①東京国立博物館「房総常州採葉記并紀州採葉記」後半

記

◎同三年春、安房ノ常陸の旅の際の作品。

「房総常州採葉記」 ①東京国立博物館「房総常州採葉記并紀州採葉記」の前半四分の一

採葉記

◎文化元年秋、駿河ノ伊勢の旅の際の作品。

「伊勢採葉記」 ①岩瀬文庫37―107 「伊勢採葉記」

◎同37―140 「伊勢及紀州採葉記」前半

◎無窮会9509 「勢州採葉志」

◎小石川植物園「蘭山採葉記」第二冊前半

◎東京国立博物館「房総常州採葉記并紀州採葉記」中、前半の「駿州勢州採葉記」

このような蘭山の採葉記類は、いずれもメモのみではなく、記事を書いているが、山本篤慶の◎印の二作ほど詳細ではない。その中で、最も文学的なものは、「遊毛記」であろう。そして、これにも「常野採葉記」「日光採葉記」等と呼ばれる別の一書が、同じ旅から作られて、そちらがより記録的なものであることが、注目される。ちなみに「江戸期山書

翻刻叢書」の「遊毛記」の解題は、

「底本として使用したものは、国立国会図書館所蔵の白井光太郎文庫の中の一冊で、同文庫および伊藤文庫の中には、『常野採薬記』『日光採薬記』という題名の写本が数冊所蔵されているが、『遊毛記』が、最も読み易く筆写されているので、これを影印の底本とした。」

とあって、「遊毛記」と、「常野採薬記」（別名「日光採薬記」）とは、同一の本の如くである。しかしながら、国会図書館の原本をまだ見えないが、管見のものに関する限り、「遊毛記」と「常野採薬記」は、内容をかなり異にする。前章の、土地の人々とのふれあいについて述べた部分で、大京院という土地の修験者の老人に菱蕤など薬草の製法を教えたという、「遊毛記」の記事を引用した。同じことながら、「常野採薬記」では、次のように記されている。

「(四月九日)篠籠田村修現者大京院ニ菱蕤ヲ教并苦参ノ製法ヲ教ヘ。」

このように、「常野採薬記」の方が「遊毛記」に比して著しく記録的であり、その分、実用に供されることが多かったと思う。たとえば前にあげた、喜多村槐園・成田三節の「日光采品録」が序文で、

「行政之餘暇、共攀巖跨谿谷、奇卉異木以互相研究矣。殊成田氏懐一小冊、以備遺志。此往年蘭山先生干此地而所録最有裨于尋求。余復備写以為採品之助」(喜多村槐園序)

と述べているのは、おそらくはこの「常野採薬記」の方であろうと思う。

このように、蘭山の場合にも、読物としての面白さを有する採薬記が、実用的なものと共に、成立している例がある。

3 植村政勝と「諸州採薬記」

更に時代がやや前になるが、読物としての採薬記の性格を、最も明確にしているのが、植村政勝(一六九五〜一七七七)の「諸州採薬記」である。政勝は、將軍吉宗に随って紀州から江戸に来て、後に駒場薬園の長を勤めた。上野益三「日本博物学史」では、彼が隠密用務も兼ねていたこと、阿部将翁との師弟関係は、将翁は政勝を門人と書いているが、明確ではないことを記し、また、本草学者というより、幕府の命に忠実に職務を遂行した錬達の技術者と定義づけておられる。

彼の採薬記は、「諸州採薬記」「諸州採薬記抄録」と二つの名で呼ばれるが、その内容は同一である。ただし、多くの写本が残り、さまざまの異同と奥書を有する。管見の15本について見ると、(イ)の如き三系統が存している。

(イ)系統のもの。

1 奥書に「享保五年より宝曆三年に(改正が)終」「宝曆五子年家重公江奉ル」「駒場原御用屋敷預り植村左平次政勝述作」の文を有する。

2 卷一の武蔵国の橋について「たよ／＼ふら／＼して」の文入る。

3 同巻鸚鵡石について「言語をなすこと甚あざやかなり。」と記す。

4 卷三の越中国の雪について「消ゆる事なし。」と記す。

5 巻四で「金天山」に関する部分が脱落する。

6 同巻佐藤兄弟の子孫を「吉右衛門」とする。

7 「常陸国」の部分が脱落。

8 大和国に住む大峯の鬼を「前鬼五鬼」とする。

小石川植物園二冊本「諸国採薬記抄録」・同上「二十七国採薬記」・東京大学T81-26「諸国採薬記」・国会図書館白井文庫本翻刻「諸

州採葉記抄録」(計4本)

(回)系統のもの。

- 1 奥書に「吉宗公江奉獻 元文五申年 家重公江奉獻 宝曆五子年 植村左平治政勝謹録」の文を有する。
- 2 「たよく」の一文なし。
- 3 鸚鵡石について、「ひとへに鸚鵡のごとし。」と記す。
- 4 越中国の雪について「消ゆる事あり。」と記す。
- 5 「金台山」の記事の脱落なし。
- 6 兄弟の子孫を「善右衛門」とする。
- 7 「常陸国」の脱落なし。
- 8 鬼の名を「前鬼後鬼」とする。
岩瀬文庫37 | 155・同上122 | 74・無窮会神習⁹⁵⁰⁸・東京国立博物館と2530
・慶応大学90 | 146・東京大学V11 | 37・同上V11 | 129・同上V30 | 87・同上T81 | 16 (計9本)

(イ)系統のもの。

脱落や異同が多い。より原形に近い。

無窮会神習⁹⁵⁰²「採草風土記」・東京国立博物館和658「諸州名所難所寄記」(計2本)

概ね、右の三つに分れる。そのいずれにも存している、政勝自身の跋文に、この書の成立過程を次のように述べる。

「右五冊ハ、享保五夷子の夏初而採葉の命を蒙り奉り諸国を巡行する事、数年に及べり。其間、草木の事および経歴せし山海駅路の事迄も委しく筆記して奉れとの、小笠原石州君より仰ありて、九卷になして諸州採葉記と名付て奉り、其後命ありて、巻数事繁ければ、珍敷事ばかりをつづめ記せよとあるに依て、毎々抄録し奉る事しかり。」(傍線筆者)

すなわち、この書は、享保五年から元文頃まで、公命によって行なつた採葉の旅の記録をまとめるように命をうけて、元文五年に一度、吉宗に奉り、その後更に、珍しい記事だけをつづめ直して提出するよう、命があったのに応えて、宝曆三年までに改正を終え、宝曆五年に家重に再び奉つたことになる。「抄録」の名は、その時の改正本をさすものである。

傍線部で見ると、最初に吉宗に提出したときには九卷本である。これは、まだ私は発見できない。しかし、小石川植物園に「二十七国採葉記」という写本二冊本^{註27}があつて、第一冊は(イ)系統の「諸州採葉記」なのであるが、第二冊は(回)(イ)三系統とも他本にはない内容で、次のように、石や草などの各部にわけて、品名を記し、説明を加える。

「自然銅 信濃国上田領山中に唐渡同様之品有之。陸奥国楨山之中にも有之候。」(金銀部)

「蚤休 熱気腹中ニアルヲ治ス。出羽国月山の脇、うしくびりと申所ニ有之候。」(草部)

これは、九卷本「諸州採葉記」そのものではないだろう。しかし、九卷本の中には、あるいは、こういった内容が含まれていたのでないかと思う。だとすると、それを削除する形ものが要求されたことは、やはり採葉記の、文学的な面白さが評価されてのことではなかつたらうか。この「諸州採葉記抄録」は草木名等のメモを一切有しない。内容は各地の奇談や、旅中の冒険談のみで、従来の採葉記の体裁は、まったくっていない。

更に安永三年には、京都の村上治兵衛他三書肆が、「本朝奇跡談」の題名で、この書を板行する。

「元明天皇六年五月甲子。天下に詔して。(略)所謂風土記是なり。」

醍醐天皇延長三年十二月に至て。其書數百卷全く備る。(略)王室中葉微にして。風土記の類都て泯亡せり。歎かざるべけんや。慶長以来泰平數百年。文物隆盛。此に於て皇朝の載籍四方より輯る。国学好事の徒亦競ひ起る。故に近世地理の書一二出つ。豈嘉賞せざらんや。頃京師の書林邑上氏。奇跡談なる物を袖にし來りて余に示し。之が添削を得て梓に上せん事を乞。其書たるを見れば。各国の神廟。靈窟。名山。大川。勝景。佳境。戦迹。古墳等。先輩の未述ざる所也。寔に與地の正史とすべし。然りといへども事 公にかゝるもの多く。悉く世に行ひがたし。此に於て不佞自ら黙せず。繁きを刈。文を省きて。本末を正し。其概便を巻端に書して以之を贈るといふ。安永三年午清明日 東都牛隱竹叢高尚採毫於洛陽錦城寓(東京国立博物館と⁴⁰² 安永三年刊二冊本)

と、序文に、そのいきさつを記すが、いうところの添削は實際にはほとんど行われていない。記事の順序がかわり、挿絵がついて、完全な奇談集の体裁にはなるが、内容はそのままである。政勝の名は末尾に近い部分で「小臣^{政勝}」と一度小さく本文中に出るのみで、一見しても作者名はわからない。

内容の一部を次にあげる。

「諸国深山に木地挽と云物有。又月役板へぎ杯。是等の業に渡世する者多し。此所右の品々を里方へ売に出る折から。山路にて男に行あふに。猥りに彼男戯をなして。交會するといへ共。男女其事を相互に他の人へ曾て語らず。若是を語れば山拂と云て。其所を追拂ふ敵敷掟にてあれば誰いふ人なし。依て此近辺の若き男女は。無用の折柄もかの山路に行事。淫案をおもふが故也。かの交りをなすに。男の方々女の方へ。白き手拭を一筋送れば、又女の方々も赤き手拭を男の方へおくり。互にこれを取かハし。交會を約せしむる印とす。若き輩ハ。男女共に手拭を貯

持と云。辺鄙の風俗。色々目馴ぬ事のミ多き中に。情慾の止がたき事。寔ニその理一也。飲食男女ハ人の大欲存セリと云も宜なるかな。」

このような辺土の風習、あるいは第二章のはじめに紹介したような冒險談が、「本朝奇跡談」また「諸州採葉記抄録」には多く含まれている。そして、その記述態度の基本には、前述したような、科学者としての強い主体性と客観性、しかも偏狭に陥らず、見聞したものをありのままに伝達していこうとする姿勢がある。新しい説話文学の誕生ともいえよう。

「採葉記」自体は、あくまで実用的なものともして生きつづけたから、政勝以後も、いわゆる動植物類の名のみを記す形式のものが主流を占めつづける。しかし、蘭山といい、篤慶といい、長途に採葉の旅を行う者の作品の中で、ともすれば、それは文学作品として分化していく要素を有しつづけた。「本朝奇跡談」の板行も含めた、それらの作品全体が、紀行文にも影響を与えたことは否めない。

近世紀行文の一つの基礎を作るのが、貝原益軒の紀行類だということ既に何度か指摘した。益軒はまた「大和本草」等の著作があり、近世の本草学史上にも重要な位置を占めている。そして、益軒の紀行文の特質である達意の和文と、豊富な記事の面白さは、近世後期、一つには本居宣長を中心とする国学者たちの和文紀行によって完成され、もう一つには大衆的俗文学として、橘南谿の「東西遊記」によって完成される^{註29}と私は考えている。

南谿もまた京都の医師である。「東西遊記」は天明年間に板行され、「本朝奇跡談」と同じ奇談集の体裁を持つ。おそらく影響はあるであろう。そのようにして見てくると、「採葉記」類全体が、益軒と南谿をつなぐ、近世紀行文学史上、きわめて重要な役割をはたしているといってもよいと思う。

四 おわりに

「諸州巡覧記」については、なお諸本の検討が必要である。特に、調査を行なっていた段階で、国会図書館が改修工事のため長期休館で、所蔵の諸本の検討ができなかった。なお今後、調査をつづけて、その全体像を明らかにしていきたい。

本稿は、日本近世文学学会昭和六十二年度秋季大会における口頭発表「採葉記」の世界」に加筆したものである。

註

- 1 拙稿「山の紀行」(語文研究63号)。
- 2 拙稿「蝦夷紀行概見」(江戸時代文学誌5号)。
- 3 拙稿「公旅紀行について」(福岡教育大学紀要35号)。
- 4 拙稿「貝原益軒と紀行文」(愛知県立大学文学部論集28号)。
- 5 本稿第三章参照。
- 6 同右。以下人名と書名、すべて同様である。
- 7 岩瀬文庫31―73。茶色に菊花地紋表紙。左肩白題箋。二三、四×一六、三纏。「読書室蔵」15行野紙を使用。第十冊以下は野紙なし。
- 8 岩瀬文庫の目録カードには、「山本錫夫氏が本草ニ関スル支那書籍ノ各種ヨリ抄録シタルモノナリ」とあるが、第5冊に松岡恕庵の「桜品」(貝原益軒の「大和巡覧記」を引用)を写するなど、和書も少々入る。
- 9 岩瀬文庫68―28。紺色に菱と菊の蜀江花菱文様の表紙。題箋、外題なし。内題もなし。二四、三×一七、二纏。
- 10 赤茶表紙、七宝花菱模様。左肩白題箋。10行書。64丁。二三、六×一六、三纏。なお阿部将翁(照任)のこの書も多く残る採葉記の一つであるが、比較的有名なのと、さほど書誌に問題がないため、本稿ではふれなかった。
- 11 岩瀬文庫30―34。藍色表紙、唐草菊桐模様。左肩白題箋。二三、三×一五、九纏。薄茶九行野紙使用。一部朱書。和歌、漢詩、雑記などである。
- 12 小野蘭山著。異本が多く存している。茶色表紙。題箋なし。二三、七×一六、六纏。
- 13 これは「衆芳軒日抄」(小野蘭山著、岩瀬文庫17―62)の末尾6丁にも附されており、「享和二年壬戌之夏」の奥書がある。
- 14 茶色表紙。左肩白題箋。10行野紙使用。朱少々入る。
- 15 赤茶色表紙。左肩白題箋。二三、四×一六、四纏。
- 16 青色表紙。左肩白題箋。漢文。二三、一×一六、四纏。
- 17 青色表紙。左肩白題箋。二三、三×一五、四纏。
- 18 紺色表紙、花菱唐草模様。左肩白題箋。二三、三×一五、四纏。
- 19 「百花苑」解題で中村幸彦先生は、「この書は一の報告書で、いわゆる隨筆として執筆されたものではない。本草学書としても記録に止まり、紀行としても体をなしていない。しかし隨筆的、紀行的な面白さ、記録としての価値は、普通の隨筆に遙かにまさるものを持っている。」「報告書であり、理学者の手になっただけに、かえって文飾はなく克明であって、やかな旅行記より遙に面白いではないか。」と記される。
- 20 解題を記された澤武人氏に、別に「高千穂採葉記の周辺」(昭和62年、北斗会刊)の著がある。
- 21 青色表紙。左肩白題箋。20行書。二四、〇×一六、四纏。「九思堂蔵板」柱の10行野紙を使用。著者水野皓山(広業)には、他にもいくつかの採葉記が存する。
- 22 茶色、青色などの表紙。左肩白題箋。岩瀬文庫14―57。二二、九×一五、八纏。
- 23 これもおそらくは採葉に用る籠であろう。
- 24 岩瀬文庫17―40。茶色表紙。左肩白題箋。二三、四×一六、五纏。10行書。「読書室蔵」柱の野紙を使用。
- 25 この紀行には岩瀬文庫37―162に異本がある。写本一冊、75丁。青色表紙。左肩白題箋。10行書。二三、二×一六、四纏。朱が少々入る。外題「榕室山陰四州採葉記」。内題「山陰四州採葉記」。内容は七冊本とほぼ同じである。
- 26 国書総目録によれば40本が現存する。
- 27 茶に白の横縞表紙。左肩白題箋。外題「諸国採葉記抄録」。内題「諸州採葉

記抄録」。奥書に、「此書、己が見しは伝写の謬れるにや、くたくしき事も少からん、みるに隠はしきことなれども侍りけれど、それを悉く補はんとせば、讎ては述者の意にもとらんことを厭ひ、そがまゝ写し置つれど、己元よりこのごとくもの書くわざ拙なれば、後の人亦をのれをして、おなじ罪を得さしめん事を恐るゝものから爰に其ことわりをしるしをきぬ。文政拾年五月閑亭にしるす 長良」とある。

28 青に白の横縞表紙。左肩白題簽。第一冊41丁、第二冊22丁。二六、二〇一八、二〇二。刊記は安永三年、江戸、野田七兵衛、大坂、和泉屋卯兵衛、京、菊屋安兵衛、村上治兵衛の四肆。他に慶応大学図書館に一本を見た。朱色に市松菊模様表紙に左肩白題簽。二二、七×二六、三〇。刊記は文政十一年、江戸、芝屋文七、川村儀右衛門の二肆である。

29 拙稿「玉葛の跡」(語文研究52・53合併号)。